

「聞き書き」による新たな「物語」へ

—歴史, 記憶, 世代をつなぐ「場」の創出—

東北公益文科大学

渡辺 暁雄 小関 久恵 遠山 茂樹

はじめに

東北公益文科大学では、平成 25 年度文部科学省「地（知）の拠点整備事業」に選定され、「地域力結集による複合的地域課題の解決」と「地域力の構成要素であり地域課題解決を担う人材育成」が地域課題解決の鍵であると捉え、事業を展開してきた。課題解決のために、主体的に行動ができる地域リーダー（人材）の育成については、「庄内地域カレッジ」（平成 26 年度に開講）として子どもから社会人まで幅広い年代を対象としてプログラムを展開してきた。本稿で取り上げる「庄内の達人プロジェクト」（以下、プロジェクト）は、その一環として 4 年間にわたって実施してきた「聞き書き」を手法とした人材育成プログラムである。

プロジェクトの詳細は後述「Ⅱ」に譲るが、推進するにあたって、大学でのカリキュラムの一環として位置づけ、指導教員を本稿の執筆者（渡辺、小関、遠山）が担当し、各専門分野から「聞き書き」を巡る研究動向や方法論を教示している。

本稿でも各自の専門分野を中心に据え、渡辺は社会学における質的調査—分けてもライフヒストリー—聞き書きの手法を用いた調査の歴史の変遷と現状、特に調査の場での相互行為の重要性に注目し、小関は社会福祉・相談援助に立脚しつつ、「達人プロジェクト」で得られた、特に「人材育成」面での成果を、話し手・聞き手・実行委員に対するインタビューから分析し、遠山は歴史学の立場から、特に佐藤清隆によるイングランド・レスター市でのエスニック・マイノリティへのライフヒストリー・インタビューの事例を考察、マイノリティグループ内での「語り」の多様性に注目している。

専門分野は違えど、執筆者全員に共通するのは、地域に居住する住民の個性・具体性、単純に一般化できない（むしろ一般化を拒む）多様性、そしてこれまで「地域」で支配的に流通していた「語り」が、より今日的な枠組みで語り直される創発性—それもまた「聞き書き」での聞き手と話し手の相互行為が少なからず契機となっている—である。

各自の論考は紙幅の都合上、概観的あるいは断片的にならざるを得なかったが、今後「聞き書き」の実践を通して、その方法や、技法に対する認識を再帰的に検証しつつ考究していきたい。

Ⅰ 社会学からみる「聞き書き」の展開—個の物語から新たな地域の物語へ

社会学においてある個人の語りに立脚した調査手法は、ライフヒストリー、ライフストーリー、ライフドキュメント、オーラルヒストリー、オーラルストーリー、ナラティブ等、研究テーマや対象や、調査の方法論によりその呼称が異なるが、質的調査の一手法として共通に認識されている。ただし「聞き書き」という呼称は社会学では必ずしもポピュラーではないが、個人の語りに立脚しているという特徴と、後述するが話し手と聞き手の相互作用が重視される点など、方法論や認識論レベルで多くの方向性を共有しているため、ここでは他の呼称に特徴的な性質にも配慮しつつ、「聞き書き」に統一して記述する。

「聞き書き」のような個人の語りを中心とした調査手法は、現時点で一般的に用いられており、また個人の語りや聞き手を巡る方法論に関する議論も盛んである。そのため聞き書きを中核とした社会学を網羅的に検証するには、この場では荷が重い。ここではいくつかの社会的「聞き書き」に焦点を当て、話し手と聞き手の対話的相互作用の中で形成される創発性、特に語ることによる話し手の（同時

に聞き手の）意識変化や成長、そして質的調査の凋落から個人的な語りが時代的に要請された側面に関して考察する。

また少子高齢化による今日の地域コミュニティの存続の危機的状況において、既存の概念枠組み（旧来の自治会・町内会組織の在り方や、その組織構造等）の限界と、新たな方向性が問われる中、「聞き書き」の手法が果たす役割—多様な住民の相互理解と、地域における複合的・可変的な「モデルストーリー」創出の可能性—について桜井厚の「対話的構築主義」を中核に据えたインタビュー手法を用いて論じたい。特に話し手・聞き手を超えた、あるいはその延長線上での、対話的「聞き書き」によるコミュニティの「再構築」の可能性について、山形県鶴岡市加茂地区での「聞き書き」調査を巡る関係者（語り手、聞き手、両者の媒介者、積極的参加者としての地域住民）や外部発信による地域内外での相互理解状況を通して論じたい。

1. 『ジャック・ローラー』と「語ること」の意義

「だれもがそれぞれの運命を背負って人生をスタートする。その運命が恵まれている場合もあれば、少しも恵まれない場合もある...《略》...俺の人生のスタートは、駄目で、無知で、利己的な継母というハンディを負っていた。あいつは自分自身と、自分が生んだ子どものことしか頭になかった」(Shaw 1930=1998: 100)

「インタビューという相互作用を通して生み出された口述の自伝的語り」(中野・桜井 9)としての聞き書きは、1920年代以降、シカゴ大学を中心とした社会学者たち(シカゴ学派)による一連の社会踏査や参与観察、生活史調査の中で用いられてきた代表的な調査手法の一つである。シカゴは19世紀中盤以降、急激な都市化、産業化、大量の移民流入により、貧困、犯罪、人種対立、文化的葛藤が社会問題化していた。シカゴ学派の研究者たちはそうしたシカゴのスラムやゲットーで、ギャング集団、非行少年、ホームレスたちの中に「参与」するスタイルの調査研究を積み重ねていった。

例えばC.ショウの『ジャック・ローラー』(1930)では、ジャックローリング(酔っ払いの懐から金品を盗むこと)で逮捕された16歳の少年・スタンレー(イタリア移民の2世)にインタビューを行い、その後スタンレーに自分史の執筆を促した。そのインタビューと自分史から、非行少年がどのような社会的・文化的・集団的環境の中でパーソナリティを形成していったのか、非行少年自身の主観的な視点を探ることができる。これはそれまで主流であった心理起源論的犯罪理論や、生物学的遺伝的犯罪理論とは全く対照的な解釈枠組である。ここでは、シカゴ学派草創期のトマスとズナニエツキらによる、「社会秩序の崩壊は家族集団の解体、個人の人格解体をもたらす」といった命題を継承しつつ、非行集団との接触による犯罪文化の継承の側面を重視しており、後の「分化的接触」(E.サザーランド)や「非行下位文化」(A.コーエン)の理論的嚆矢であるとも言える。

この中でショウは、「まず第一に指摘しておきたいのは「少年自身の物語」が、非行少年一人ひとりの診断や治療に重要であり、そこから「少年の態度や関心やパーソナリティにあった治療計画の基本的方針を立てることもできる」(Shaw 1930=1998: 53)としている。もちろんこの「治療」とは、医療・救護施設などでの「対処方法」であり、語る本人の外側での治療プログラムを想定している。この時点での「語り」の目的は、あくまでも非行少年の「治

療」であり、語り手の主体的側面に注目する視点は弱い。しかしショウら当時のシカゴ大学の学生、若手研究者の指導的立場を担ったE.バージェスは、「個人が経験を表出するまさにその行為は、カタルシスを起こさせる効果をもたらすだけでなく」、「人生に対するその人自身の主体的なパースペクティブが与えられる」と述べている。そうした主体の形式が「衝動や動機を統制して、なんらかの高い目標に向けて自力で運命を切り拓く重要な方法である」としている(Shaw 1930=1998: 308)。

そこには本人が語ることで自分が癒しとなり、それまでバラバラであった体験の断片が、自己のストーリーを物語る事によって意味ある一纏まりの主体を形成し、また語り手による語り聞き手に共有・理解されることでそれが人生の指針となる。これは後の「ナラティブ・アプローチ」へとつながる発想の社会的「原点」であるとも言える。

2. 「聞き書き」の凋落と復活

「方法論的禁制にとらわれている人びとは近代社会について〈統計的儀礼〉で飾られた小ざれいな製造過程を通過したこと以外は、何も発言しまいとすることが多い。かれらの製造するものは、たとえ重要ではないとしても真理である、とよくいわれる。私は賛成しない。それどころか、これがどうして真理なのかとますます疑惑をもってきた。精密さとか、まがいものの正確さが、いかに「真理」と混同されていることだろう。抽象的経験主義が唯一の「経験的」な研究方法である、といかに誤解されていることだろう」(Mills 1959=1965: 93)

1930年代まで隆盛を極めていたシカゴ学派とその社会的アプローチであったが、1940年代から社会学研究の主流は構造=機能主義的な理論的枠組みを柱とするものや、数理統計学的手法による大量調査を中心とした経験主義的アプローチへとシフトしてしまう。その背景には、シカゴ学派第二世代の重鎮R.E.パークが「社会的実験室としての都市」と呼んだシカゴの都市機能が次第に整備され、後の第二次世界対戦参戦による国家的求心力と戦後の冷戦構造、そして「パクス・アメリカーナ」とも呼ばれるアメリカの経済的・社会的安定にある。社会の構造的安定は、誇大理論と抽象的な経験主義の相互補完的な研究スタイルを大量生産することになる。

しかし1950年代後半以降、それまで安定的だった社会システムに、人種問題(公民権運動)、政治的腐敗、そしてベトナム戦争と、多くの矛盾とほころびが生ずるよう

なり、労働運動や学生運動が世界規模で激化した。こうした時代的潮流に先駆けて、C. W. ミルズが『社会学的想像力』の中で大々的に「誇大理論」批判、「抽象的経験主義（＝数量的統計調査至上主義）」批判を行い、かれのマニフェストに呼応するように、シンボリック相互作用論、現象学的社会学、エスノメソドロジー、社会的構築主義といった、「ラディカル社会学」諸派が登場する。大きな理論的枠組みをベースに、社会構造から個人を捉える構造＝機能主義とは異なり、ラディカル社会学諸派は、個人の側から社会構造を捉える視点や方法を共通の特徴としており、調査手法として質的調査（参与観察、ライフヒストリー、ライフストーリー…「聞き書き」）と高い親和性を持つものだった。

また数量的統計調査の全盛期、聞き書きのような質的調査は、データ（語られたもの）の信憑性・妥当性と客観性・代表性を担保することができず、科学的には数量的統計調査に「劣る」もの、質的調査は量的調査の結果を補助するものとしが見られていなかった。

だが、例えば O. ルイスの『サンチェスの子どもたち』（1961）では、メキシコ市の一貧困家族の各構成員（父親および4人の子ども）の語りを長時間かけて採取し、それぞれの語り口調を活かしながら記述した「自伝的物語」だが、5人の家族メンバーそれぞれの視点から、同じ出来事や人物に関してお互いに独立して述べさせている。ルイスはこの手法を「羅生門式手法」（The Rashomon-like technique）と呼び、これによりデータの信憑性をチェックできるとしている。同様に複数のライフストーリー事例を集めることにより、同様に語られる共通点が必ず出てくる。これを D. ベルトーは「飽和」とか「繰り返し」と呼んでいるが、このプロセスを経て質的な事例が個別解釈の域を脱し、客観化・一般化可能となるとしている。

また数量的調査では、何らかの仮説があって、それに基づいて調査票が構成され、何らかのデータを獲得する。こうした仮説定立型の演繹的手法では調査する側が終始、調査の内容や枠組み、あるいは調査対象を統制することになるが、そこには話し手の主体性が見られず、個人はあたかも「プロクルステスの寝台」のごとく、仮説に合うかたちに引き伸ばされ、切断されてきた。それに対して「分析的帰納法」は K. プラマーによると「一つの事例を詳しく調べることから始まり、そこから調査すべき分野の定義と仮説的な説明を導き出そうとする。その次の手続きは、別の事例を詳細に検討する事であり、ここでは必要とあれば定義と説明を修正し、2つの事例に適合するような新たな普遍化を行う。ついで第3の事例を検討し、同じ

ように、この事例についての記述が先の2つの事例にも適合するように修正を加える。こうして、多くの事例に適用でき、一つの普遍化を形づくるような説明が次第にできあがってくる」（Plummer1983=1991: 185）というように、「話し手」の主体性が前提となっている。

話し手個人の視点を重視する手法は、特に経験主義的アプローチを重視する量的調査からするとデータの客観性と信憑性のエビデンスが求められる。それに対し上記の質的調査手法は、個の視点とデータの信憑性を両立させる戦略を開発し、のみならず質的データ特有の生き生きとした了解可能性を提示している。

3. 「対話的構築主義」と「聞き書き」

「語りは過去の出来事や語り手の経験したことというより、インタビューの場で語り手とインタビュアーの両方の関心から構築された対話的混合体にほかならない。とりわけ、語ることは、過去の出来事や経験が何であるかを述べることに以上「いま-ここ」を語り手とインタビュアーの双方の「主体」が生きていることである（中略）インタビューの場こそが、ライフストーリーを構築する文化的営為の場なのである」（桜井30-31）

前にも触れたように、「科学」として質的データの信憑性や客観性をいかに担保するか、データを補うために関連文献、統計、文字資料、多くの人の語り等を用いることが要求され、また聞き手の研究者も「羅生門式手法」や「飽和プロセス」、「分析的帰納法」といった新たな技法を生み出していった。このように何らかの補助資料が必要だったり、ある程度以上のインタビュー「数」が必要とする状況に対し、桜井厚は個人の語りそれ自体を信頼できるデータとして提示するための可能性を追求した。

今日「日本の社会学における質的調査の、ひとつのスタンダード」（岸194）とされる桜井厚の「対話的構築主義」では、インタビューの「場」、オーラルデータが生み出された「場」に着目し、話し手だけでなく、聞き手もその場での相互行為を構成する「主体」と位置付ける。そしてデータがどのように生成されていくのか、話し手と聞き手の相互行為のプロセスを詳細に提示することで、データの信憑性を確保できるとする。ただし対話的構築主義は、そうした手続き論的な了解を得るのみならず、相互行為場面での「聞き手」存在に着目する。それに伴い、聞き手と話し手の間では、従来の調査手法で内在していた「非対称性」（＝聞き手による「統制」）が解消される。そうした平等

な主体同士の語りの中で、話し手の「経験」が相互行為の場で両者の解釈を帯び、「ひとつのまとまりを持った語り」が構成される。そこで生成されるテキストは、厳密にいえば語り手の実際の経験とは独立したストーリーであると同時に、その場で交わされた対話は語り手の経験に新たな意味を与える。そうした話し手・聞き手による物語の再構築をインタビューの主眼としたことで、桜井の方法はインタビュー調査における認識論的な転換を迫るものだった。

桜井の対話的構築主義が社会調査の分野で広く知られるようになったのと同時期、林野庁、文部科学省主催による第1回「森の“聞き書き甲子園”」が、作家・塩野米松の指導の下開催されている。森の、にとどまらず様々な技を持った「達人」にインタビューし、あたかもその人が語ったように書き起こす「聞き書き」も、対話的構築主義と方法論的・発想的・認識論的に多くの共通点を有する。例えば「聞く」という行為の能動性・主体性についてである。対話的構築主義ではインタビューの書き起こしの際、綿密なトランスクリプトを行い、聞き手の存在を明示するが、「聞き書き」でも、やはり話し手・聞き手の語りを全て書き起こし、さらに編集の段階で話し手が一人語りしているが如く、聞き手の語りを変換する。この作業工程自体が「ひとつのまとまりを持った語り」を生み出している。

また桜井は「基本的な前提となるのは、インタラクションといってもその場限りのものではない」（桜井・西倉81）と述べている。つまりインタビューの時間や回数が相互理解を深めるという。聞き書きでも聞き手が書き起こし、編集した原稿を話し手にチェックしてもらい、といった複数回の相互行為を経て語りを練っていくとともに、両者の相互理解を醸成していく。

ただし「聞き書き」は事前に話し手についての情報を収集し、質問項目を準備する半構造的調査であり、それほど厳密ではないにせよ調査を「統制」としているともいえる。桜井は、そうしたインタビューにおける権力の偏在はあるとしながらも「しかし、そうした指摘は「語るワーク」の実践を前提にしていながら、むしろそれをさえぎったり、さまたげてしまったりするインタビューアの統制行為にこそ妥当する」（桜井・西倉265）とし、原理主義的発想を否定している。

「聞き書き」の塩野は“聞き書き甲子園”の研修テキストで、次のように述べている。「聞くことは、対話による物語の創造です。むかし、いま、未来の世代間をつなぎます。こちらとあちら、自分と他人をつなぎます。対話ですから、聞く側の事前の準備や対話する力などによって、おなじ人に聞いても、まったく異なる物語が生まれます」

（『塩野米松流 聞き書き術』）。対話による「物語の創造」、これが両者に共通する最も重要なポイントである。何らかの目的達成や仮説の検証よりも、信憑性や客観性を補償することよりも、話し手と聞き手の対話というシンプルかつ自由度の高い枠組みだけを与え、そこから紡がれる物語を成果とする。そこには偏狭なアカデミズムに対する抵抗とともに、様々な分野で、ジャンルを超えて、それを欲求する「共時（同時）性」が存在するようだ。

4. 主体的な個のあつまりとしての地域へ——新しい物語の創出

筆者は2016年度以降、鶴岡市の港町・加茂地区での大学生・高校生による地元住民への「聞き書き」に関わっている。その中で、ある高齢の住民にインタビューをし、書き起こされ、丹念に編集された作品が、いざ発表の段階で話し手から「掲載拒否」されたことがある。社会調査においては被調査者の意志を十分尊重し、発表断念の可能性も視野に入れるべきと考えられており、それにはもちろん同意である。しかしこの時には少なからず「拒否」に対する「違和感」を覚えた。インタビューに先立ち、語られた内容は冊子化され、外部に発信されることを通知してあるということへの違約という側面もあるが、それ以上にこの掲載拒絶から、地域社会のネガティブな「モデルストーリー」（特定のコミュニティ内で特権的に地位を占める語り）が感じられたからだ。つまりここでのモデルストーリーは、余計なことは言わない、出しゃばらない、つまり個の主張より集団秩序の維持が優先されるということ。「惰性化」したモデルが、少なくとも高齢世代には強く影響を与えている。

都市社会学者・吉原直樹が指摘しているように、もともと日本の「町内」の特徴は、多様性を受け入れるという点にあり（吉原137-157）、さらに港町として発展した加茂は寛容性や多様性を伝統として受け継いできた開放的な地域である。しかし近代化以降、町内会が国民国家に編成され制度化される中で、過剰なまでの「安心安全な社会」を目指す傾向が強まった。アメリカ郊外や「ゲーテッドコミュニティ」がその典型だが、そうした「相互監視と異端摘発のコミュニティ」（大日方226）ではない在り方、寛容性や多様性を由とする開放的なコミュニティ「開いて守る」まちづくりは、加茂地区に限らず今後のまちづくりにとって非常に重要なテーマである（渡辺51-52）。

「モデルストーリーがあるからこそ、差異性も大事だということです。差異性も含み込んだ上で、新しいストーリーをつくり出さないといけない。常にモデルストーリー的

なものが時代や状況の変化に合わせて変わっていく側面こそが重要」（桜井 80）。存続させる「べき」コミュニティ自体の存続が危ぶまれる現在、出しゃばらなければ、積極的に語らなければ地域の存続（地域の「記憶」も）が危険にさらされる現在、性別・世代間役割分業も破綻しかけている現在、上の世代も下の世代も、個を主張できる仕組みが「聞き書き」であり、この中で重層的に共有された個々の経験は、柔軟で主体的な「中間集団」としてのコミュニティを形成していく可能性があるのではないか。

やはり加茂地区での話だが、完成した聞き書き作品を朗読する住民参加のワークショップがあった。出席者の中に、直近に聞き書きを行った「話し手」がおり、ワークの最中は非常に緊張した面持ちであったが、終了後、笑顔で次のように語った。「地域に対する想いやまちづくりへの積極的なかわり方を率直に話したため、他の住民にどう思われるか、不安だった。でも聞き書きを読んでもらって、他の住民から「よくぞ語ってくれた！」と、同意や称賛をもらって、今では素直に話して本当に良かったと思っています」。

「マスターナラティブ、ドミナントストーリー」（全体社会における支配的言説）、「モデルストーリー」（特定地域・集団内での支配的な語り）を乗り越えた《いま、ここ》での住民と他者（学生など）、あるいは住民相互の対話的構築が契機となった新たな「対話的共同」。これが地域のワークショップを通して共有され、また収集された聞き書きは年々冊子化され、あるいはコミュニティのホームページに配信される。そうした情報にアクセスした地域外の人々にも、地域の物語は共有される（＝心情的住民）。今後、地理的・概念的に固定された「地域」とは異なる、複合的で可変的（Variable）な地域ストーリーが生成されていくことを期待したい。（渡辺 暁雄）

II 地域人材育成における「聞き書き」の有効性 ～東北公益文科大学「庄内の達人プロジェクト」 実践からの考察～

「庄内の達人プロジェクト」（以下、プロジェクト）は、東北公益文科大学地（知）の拠点整備事業において展開した「聞き書き」を手法とした地域人材育成プログラムである。

「聞き書き」は、話し手にインタビューし、語られた言葉だけで文章を構成し作品にする一連を指す。一般的なインタビュー記事では質問と回答が交互に記載されるが、「聞き書き」では出来上がった作品は話し手があたかもひとり語りしているような第一人称の文章になる。

本プロジェクトで手法を採用した作家・塩野米松流「聞き書き」では、語られたことを録音し一言一句を書き起こすため、話し手の口調や方言などの特徴がよく現れる。また、聞き手が誰で何歳であり、どのような問いが寄せられるかが話し手の語りに作用することから、その関係の動態が作品に映し出される「聞き手の人生を反映する文芸」（『塩野米松流聞き書き術』）とされている。

そもそも「聞き書き」は、民俗学において地域を「歩く、見る、聞く」という一連の行為から得た情報を記す方法として一般に知られている。現在では歴史・文化、生活を見つめ直し、地域おこしやまちづくりにつなげていく地元学や自地域学といった活動が注目され（久島 2010）、その中で「聞き書き」の手法が活用されている。また医療・福祉現場においても、利用者や患者の語り（ナラティブ）をケアに活かす「介護民俗学」（六車 2012）や、ナラティブホーム（佐藤 2015）の実践に代表されるように、超高齢化・人口減少が進む我が国の各分野における方向性を模索する中で、「個人の語り」から始める在りようとして注目されている。

他方、人が学び育つ人材育成や教育分野における「聞き書き」については、中学校や高等学校における国語教育実践・研究が主な動向として捉えられる。作文や文章表現等「読む、書く、話す、聞く」といった国語教育を、より豊かなものにしようとする現場教員の実践報告や研究（米山 1976、藤田 1993、雲山 2002、遠藤 2005、礼埜 2015 等）が散見される。この中には、職業教育や総合的な学習としての効果について指摘する報告もあり、教室の外に出て（あるいはゲストとして来てもらうことで）様々な仕事や活動をしている人物との出会いを通じた、国語力に留まらない「聞き書き」の効果も報告されている。また、平成 14 年度より開催されている「聞き書き甲子園」の取り組みを通じた森林・環境教育における有効性を検討した研究（安藤・興梠 2014）や、その手法を取り入れた高校での実践報告・研究（石井 2011, 2013）も見られる。なお、聞き書き甲子園は、全国 100 人の高校生が森や川、海の名手・名人に「聞き書き」する取り組みである。いずれにせよ、実践・研究の手法として使用されることの多い「聞き書き」の特性上、手法そのものの有効性について検討した研究は少ない。

本研究では、特定の地域（山形県庄内地域）を対象とした「庄内の達人プロジェクト」における「聞き書き」について、地域を理解し地域課題解決に向けて主体的に行動できる「地域人材育成プログラム」としての有効性を検討することを目的とする。具体的には、話し手（達人＝地域住

民), 聞き手(大学生), その出会いの媒介者となった実行委員(地域の若手住民)の三者へのインタビュー調査から, プロジェクトが目的としていた次の2点について検証したい。

第一に, 本プロジェクトにおいて獲得できるスキルとして想定していた「地域課題への認識」が如何にして得られるか(地域/地域課題理解)。第二に, 地域人材育成の手法としての成果を検証する。具体的には, 何がどのように育成されたか, 学びの主体からすれば何をどのように得たかという点について考察する。

1. 「庄内の達人プロジェクト」の概要と「聞き書き」

本プロジェクトは, 高校生や大学生が山形県庄内地域で活躍する「達人」(地域住民)を訪ねてインタビューし作品にまとめるという「聞き書き」の中で, 自分が住む地域がどのような人の思い, はたらき, 関係性で成り立っているかを知り, 理解し考えてもらうための地域人材育成プログラムである。学校教育の中ではなかなか出会うことのない人たち——地域に根差した伝統的な文化を大切に守り継承しようとしている人たちや, さらに新たな光を当てて展開しようとしている人たち——いわゆる地域の「達人」に「聞き書き」を通して出会い, 少子高齢化, 地域経済の衰退, 人口流出等の社会問題を, 達人が語る「ものがたり」を通して具体的に理解し, 「社会」を知るきっかけとしてほしいというねらいが企画の背景にある。なお, 過去4年間で30名近くの庄内の達人と高校生・大学生との出会いが実現した。

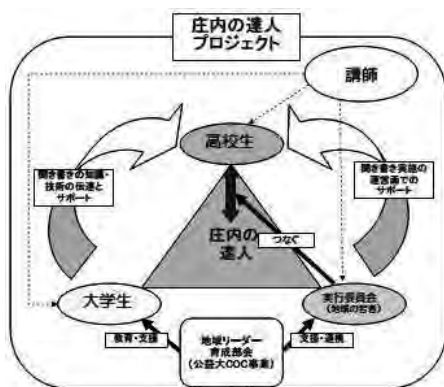


図1 庄内の達人プロジェクト全体像

高校生は庄内地域の高等学校4校から参加があり, 平成26年度4名, 平成27年度2名, 平成28年度2名, 平成29年度3名の参加であった。プロジェクトの主な内容としては, (1) 聞き書き研修合宿(夏休中に実施。聞き書

きの手法「聞き書き」による新たな「物語」へ—歴史, 記憶, 世代をつなぐ「場」の創出—35を学び, 参加者同士の交流を図る), (2) 達人へのインタビュー(秋に実施。聞き手が話し手の自宅や仕事を訪問。内容はICレコーダー等で録音), (3) インタビュー内容の書き起こし・編集(秋～冬に実施), (4) 成果報告会(春に実施)となっている。

大学生は本プロジェクトと連動して展開した東北公益文科大学人材育成強化科目「プロジェクト型応用演習」において聞き書きの手法を学修・実践しながら, 上記(1)(3)では高校生のサポート役を担った。参加者は平成26年度4名, 平成27年度11名, 平成28年度21名, 平成29年度27名であった。

また, 地域の若手住民で実行委員会を構成し, 高校生や大学生が聞き書きを行う「達人」の選定という出会いのプロデュースや, 聞き書きの手法を学ぶ合宿や成果報告会の運営のサポート役を担っている。実行委員の役割として設定したのは次の3点である。①「後輩」を育てることを通して「自分」も育つ, ②各世代のつながりを取り結んでいく「ネットワークの要」になる力を身につけていく(つながりマネジメント), ③庄内地域の魅力を発信していく。

なお実行委員は平成26～29年度の間に, 農業, 個人商店, 企業, 行政, コミュニティ自治組織等に携わる約20名の参加があった。

また, 本プロジェクト開始に当たっては, 聞き書き甲子園の運営を担当するNPO法人共存の森ネットワークへの取材の他, 作家・塩野米松, 小田豊二両氏より助言・指導を受けた。特に, 聞き書き甲子園の講師である塩野氏には, 継続的に合宿研修や報告会における講評を担っていただいている。

ここで, 改めて塩野流「聞き書き」について確認したい。話し手の話を録音し, 内容をすべて書き起こすことについては前述したが, その後, 編集段階では質問を消して, 話し手の言葉だけの文章に整理しまとめる。それが「ひとり語り」とされる所以である。また, インタビューの際の心構えとして, 「相手の方に精一杯の敬意を表すること」, 「自分の中の常識や想像を疑う」姿勢で臨むことを重視する。

この姿勢は録音内容を書き起こす際にも引き継がれることになる。例えば, 作業の最中には「どの文字を使って表現するか」を考えることになるが, 「『んじゃ』という言葉を使ったとする。『んじゃ』というのを, どう書き起こすか。文字に表すと『んじゃ』にするべきか, 『うんじゃ』とするべきなのか。一個一個の字を起こすたびに考え

込みます。」(『塩野米松流聞き書き術』)というように、「言っている趣旨を曲げない」、「その人の人格を崩さない」ことを意識しながら、あるいは、その人が語りたかったことや、その人自身を表すための文章表現を常に考え続け、作品が完成する最後まで、話し手との対話を続けることになる手法と言える。

2. 三者へのインタビュー調査から

(1) 調査方法

本プロジェクトを経験した話し手・聞き手・実行委員へのインタビュー調査は、三者の立場から2名ずつ計6名の協力を得て、平成30年4月に実施した。話し手はA氏(平成26年度協力者)及びB氏(平成29年度協力者)、聞き手はいずれも大学生として参加した2名(庄内地域外出身者)でC氏(平成26年度参加者)は社会人になっており、D氏(平成29年度参加者)は現在も大学生である。実行委員は平成28年度及び29年度参加のE氏、F氏である。

インタビューは「三者の立場から「聞き書き」を手法としたプロジェクトの一連を経験してどのような感想を持ったか」を問いの軸とした半構造化面接で行い、参加者の「学び・育ち」や「地域や地域課題理解」にどのような影響があったかという点について探ることを目的とした。

なお、A氏、B氏は個別に、C氏とD氏、E氏とF氏は同時に面接を行った。

(2) 調査・分析結果

インタビューで語られた内容はICレコーダーで録音し、逐語録を作成した。なお、インタビューにおいて語られた内容は鍵括弧で表記、鍵括弧内()表記は筆者による補足である。また、本文中【 】表記は分析図と対応(以下、①～③は図2、④は図3参照)している。

①「聞き書き」から何を学び、育つのか

《話す・聞く・まとめるという行為への自覚》【a】

学びの主体である聞き手からは「聞き書き」を経験したことでの、話す・聞く・まとめるという行為への自覚が語られた。書き起こしや編集作業の段階ではICレコーダーで録音したインタビューの対話を繰り返し聞くことになるが、「自分の質問も音声も残っていて、会話を録音して聞くって言うことが(日常的には)あんまり無い」(D)ため、「ここでこう聞いておけばもっと良い情報を聞いたのとか、自分が聞きたい情報をどう聞けばよいのかと反省的になれた」(D)という。

また「聞く」という行為についてC氏は「受動的ではな

い「聞く」」であり、「私の興味のあるところが聞き書き作品になる」と述べ、またD氏の「ライブで質問して、対話ですもんね。完成・正解はないのかな。」という発言にあるように、聞き書きにおける能動的・相互的な聞く行為【b】への気づきが語られた。

加えてC氏からは、「聞き書きのことはわりと日常的に思い出すんですよ。」という発言があった。C氏にとっては経験から数年が経過しているが、「結構ことあるごとに思い出すんです。工作中、お客様と話しているとき、人の話を聞く場面。お年寄りと話していても「あ、聞き書き」と思うし。」と日常的な人との関わりの中でいつも想起する身体化した経験になっていることが分かる。また、「人の話を聞くってことができるようになりました。(中略)仕事を教えてもらうのも、いろんな人に話を聞かなくていい。その中で、相手から話を聞きだす、引き出す、相槌を打つとかは、うまくできるようになったと思います。」

(C)という語りからは、「聞き書き」を通して自覚的になった能動的な「聞く」という行為が、日々の対人関係の中で繰り返し想起され実践されていくことで「できる」に変化していく可能性【c】が示唆された。

《社会を覗く目・モノサシができる》【d】

プロジェクト運営をサポートした実行委員からは、「冷静に自分の人生を歩めるモノサシができる」(F)という指摘があった。具体的には次の発言にある。「学生さんたちも聞き書きをしていたら自分のためにもなりますよね。そういうのをやってきていない私たちって、社会にある意味自分の意思で行くんだけど、何の見本もないっていうか、人の人生を聴いてから社会に出るわけじゃないから、そういうのが一旦あると、「あの人がああいう風にしゃべっていたのってこういうことか」って。それっていいですよ。大事ですよ。聞き書きやっているときには分からないんですけども。でも言葉が残るんですよ。「あ、これだ」と。私もそれがほしかったなと思った。」(F)

また、聞き手と話し手の媒介者となった実行委員にとっても、自分自身を映し出す鏡【e】の働きがあったようだ。

「聞き書きにただ参加して人の話を聞いてるだけでも、自分で勝手にいろいろと考えるんですよ。この人こんな人生送った。自分もそのくらいのときそうだったな…。こういう風になってしまった。で、どうした?と気になったり。これからの人生は長いんで、サポーターで聞いていたこの聞き書きが、自分の人生の中で「あ、あのときの聞き書き」と思うときがやってくるんじゃないかなと思ってます。」(F)鏡を通して自己の人生を振り返り、今後の人生の一つのモノサシを得ることにつながったと

ということだろう【f】。

《個人の語りから地域とその課題を知る》【g】

地域やその課題理解という点では、「聞き書きをしたことによって庄内にどんな学校があったか、どういうことに苦労したとか、土地の歴史など自ずと勉強になった。庄内の土地を知るということにすごくつながったなと思います。」(C)と、話し手の個人の語りを通して地域理解が自然と進む様子が伺える。

また、本プロジェクトでは話し手の自宅や仕事場、あるいは公民館やコミュニティセンター等でインタビューを行うが、聞き手からは「この人がこういう環境で育ってきてこういう話をしているんだなというのはイメージしやすかった。自分がその景色を見なくても、その人の話し方などで想像ができた。(事前に)フィールドワークをして見た景色も、話を聞いてそういうことだったんだなと実感できた。」(D)という発言があり、「聞き書き」の「場」を通して人と環境の関係性への気づきが得られ、その上で話し手やその人が住まう地域理解をしている様子が伺える。

《地域への愛着の醸成》

地域への関心や愛着については、話し手との関係はもちろんだが、プロジェクトに関わる実行委員の姿や、成果報告会に参加した住民の反応が影響しているようだ。「地域の人がこんなに喜んでくれるんだ」と思ったのが一番衝撃だったんですね。自分たちはそんなに大きいことをしているつもりはなかったのに、聞き書き発表会のときに本当に感動してくれている人がいて、この人たちにとってはお金以上のことで、大事な歴史・文化・記憶が残って良かったというのはこういうことなんだと。自分が感動させられました。「本当に重要なものになりました。」とお願いした。こういう風に役に立つことって日常生活で無いので、こっちもうれしかった」(D)。

完成した作品や、聞き手の気づきや学びを報告する中で、その反応として「感謝」や「感動」が住民からフィードバックされることで、愛着が醸成されていった様子が分かる。

実行委員の地域への思いに触れて刺激される側面もある。「本当にやりたくて(聞き書き)をやっているんだなと思った。何でも助けてくれたし、すごい心強かった。その人たちにとっても自分が求められているんだなと。(中略)実際に現場に行くと現場に溶け込む。聞き手もそこが思い出になる。」(D)

このような住民との関係性から「地元よりもこっちのほうが知っていると思う」(C)と言えるまでに至るのかもしれない。

②聞き手と話し手のあいだでは何が起きているか

《聞き手：知らないからこそ聞ける【i】⇔話し手：聞かれることで気づく【j】》

今回インタビュー協力者となった聞き手は2名とも大学進学を機に庄内地域に移り住んだ。この2名にとっては地域の記憶は皆無に等しい。しかし、「知らない」からこそ「聞く」に専念できる可能性が示唆された。「自分の出身地だとあたりまえになってしまっていて質問も出なかったかもしれない。」(D)

そして、それは話し手自身にとっての自己や地域への認識も同様ではないかとの指摘がある。「何が魅力なのかは他の人から聞かれないと分からないんだと思う。話し手も話してみて初めていいなと認識したかもしれない」(D)。また、それは「そこに暮らしているってだけでそれは文化と呼べるし歴史なんですけど、(聞かれることで)認識が変わると思うんですよね。もっと大それたことだと思ったけど、身近なものだったという。敷居がどんどん下がっていくと愛着がわくと思うんですよね」(C)と、自地域のごことはあまりにも日常で「あたりまえのこと」となり、そのあたりまえが尊いことについて「聞かれることで気づく」という側面が見て取れる。

話し手の立場からは、まとめて話すことや書くことは大変だが、「聞かれればそのことに対しては答えることはできる」(A)、「真面目な態度で聞いてもらってありがたかった。引き込まれてこちらも、学生さんから聞かれたことを「あ、あのときこうだった」と思い出しながらしゃべった」(B)と語られた。

聞き手に問われることで語りがつくられる【k】、言い換えれば、語りがともに「共同作業」によってつくられていることが分かる。

③記憶の継承としての聞き書き

《人生を検証し、吟味して受け渡す》【l】

「聞き書きっていうのは、ひとつ自分の人生を検証するようなもんで。」(A)と話し手は語る。一つひとつ丁寧に質問がされることで、今までの自分の仕事や生活を振り返り、それを棚卸しして受け渡す行為だったといえるだろう。

同時に、ただ聞かれたことに答えるということではなく、どう話せば伝わるかを考えて答えていたと述べる。「こういう時代もあったんだということで、自分の生きてきた生き様を話をするのですが、今の豊かな時代を生きてきた学

生さんの受け取り方はどうかということも考えた。何と言いますか、自分の自慢話だけではうまくないですから、なぜそういう環境の中で生きてきたかという話をするわけですから。成果だけを話すのでは意味がないと思うんですよ。なぜそういう風にしなければならなかったのかを心の中に踏まえながら話をしないと駄目だなということを考えていました。」(B) この語りからは、時代背景や環境が個人の人生に深く関わっていることを含めて、目の前の若者に伝えたいという思いが見て取れる。

また、この聞き手に受け渡す行為は「記憶の継承」【m】とも言える。記憶は案外薄れていくもので、「昔のことや苦勞、今までの流れをみんな忘れてしまう」(A)と述べられた。「聞き書き」っていうものを聞いたときに、これはいい事だな、最後までやらなきゃいけないなと思った。(中略) 祭りのやり方さえ分からなくなる。(行事の際の)お母さんの味とか、地域それぞれの料理も分からなくなっていく。(中略) つながりが無くなっていく」(A)。この発言からは、現在の地域の現状や仕組みがどのようにつくられてきたか、地域の記憶を伝える場としての聞き書きの重要性が指摘された【n】。

そして、「残していかなきゃならない。どんな些細なことであっても。家族構成であっても、仕事のやり方だってそうだし」(A)と、伝えていかなければならないことは大きな歴史ではなく、個人が生きた歴史であるという指摘もあった。当然のことではあるが、これらの記憶は何らかの方法で伝えられなければ継承されず、個人が持つ地域の記憶の断絶を危惧する話し手の思いが伺える。

《話し手の語り・記憶が形になることの重要性》

聞き手の問いから紡ぎだされる話し手の語りは、作品として形になり、地域で行われる報告会で発表・共有される【p】。この消えゆく言葉を形にすることの重要性については、三者ともに語られた。内容は以下に記載する。

話し手：「昔のことや苦勞、今までの流れをみんな忘れてしまう。「聞き書き」っていうものを聞いたときに、これはいい事だな、最後までやらなきゃいけないなと思った。」(A)

聞き手：「(聞き書きの重要性は)形になるというのがまず一つだと思うんですよ。心の中でつぶやく言葉はすぐたくさんあると思うんですけど、それはどんどん消えていくものだし、それがきれいにまとめた状態、実体のあるものになるというか。(中略)自分ひとりではできないことだと思うので」(C)、「相手が高齢者とかになってくると亡くなってしまいかもしれない。それが残される、継承される。(中略)(聞いた話は)地域の人は誰も知らなくて、その方の記憶にしか残っていないことだった。あの場(インタビュー)で話さなかったら(書き残さなかったら)誰も知らなかったかもしれない。」(D)

実行委員：「聞くことがなかったであろう話を、きちんと掘り出して見える形にさせていただいたというのは、本当に宝だと思うんですよ」(E)

④媒介者・代弁者としての「聞き手」の可能性 《知っていたつもり→出会い直し(聞き手がつなぎ目を結び直す)》

地域の若手住民にとっては、高校生や大学生が住民に「聞き書き」することで、その住民のことを「知っていたつもり」になっていたことに気づく。「一対一で学生さんたちが向き合って聞くと、学生さんは本当にその人を知らないから、「昔は何をしていたんですか」「若い時何をしていたんですか」(と聞く)。私たちは仕事上そういうことって聞けないんですよ。会議などで毎日顔を合わせていても、そういう話にはならない。学生さんたちが代わりにそれを聞いてくれて、私も(インタビューに)立ち会ってますけど、「え、この人そんなことしているの?!」というのが実際ほとんどだった。」(F)

これは、高校生や大学生が媒介者となって、住民同士のあいだにあるつなぎ目を結び直す【q】ことにつながっているのではないだろうか。隣人である故にあえて尋ねることもなかった事柄について、まっすぐな関心を持って聞き、語られていくことで、地域住民の出会い直しを演出する。

《個人の語りを地域で共有する(聞き手が媒介(代弁)者となる)》【r】

作品として形にされた「聞き書き」の内容は、あくまでも「個人語り」である。この個人の言葉・語り(ものごた)りを、どのように地域で共有していくか。

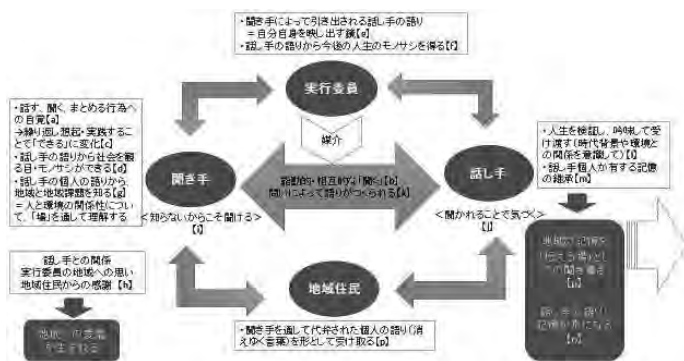


図2 聞き書きにおける相互関係と学び

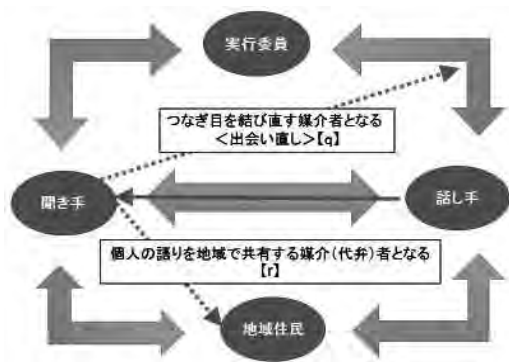


図3 媒介者・代弁者としての聞き手

「地域おこしのためにどういうふうな働きをしていけばよいか。それが課題だと思うんですよ。変な話、その人個人の自慢話になってしまう（危険性がある）もんだからの。そうでなくて、「昔はこの地域はこうであった」という話をどういう風にして（受け取るか）。昔のようにはならないかもしれないけれど、昔の人と同じように地域のことに関心を持って取り組めるかというの。その辺が大事だと思っていますけれど。」 (B)

話し手からは、他の地域住民とどのように共有していけば良いか、地域振興にどのように還元するか、という点について不安や疑問が出された。それは次の発言からも読み取れる。「案外プライバシーのことがあるからの。（自宅に個別に）来た時には話すけども、みんなの前では（話しにくい部分もある）の。」 (B)

一方、完成した作品を住民に披露する成果報告会について、「「良いな」と思って聞いていました。学生さんから読み上げてもらって、参加者で意見を出し合うというのは良い。自分で話すというのは恥ずかしいからの。「聞き書きをしたらこの方からはこういう話がありました」と要点だけでも（発表・共有ができれば）の。「昔はこうだっけの」とかの、そういう風に使っていければの。」 (B) というコメントがあった。個人としての語りを、話し手が自身で発言・発信することにはためらいや恥ずかしさがあるが、高校生や大学生が「代弁者・媒介者」として存在することで、地域での共有やさらなる活用に可能性を感じている様子が見て取れる。

3. 聞き手の学び・育ちを超える「聞き書き」の可能性

前節で分析した結果について、特に聞き手である高校生や大学生の学び・育ちに焦点を当てた場合、次の3点にまとめることができる。

(1) 「人との関わり」という生きる上で欠かせない行為の中で必要となる対話（話す、聞く等）がどのように行われているのか「自覚」し、日常の中で「できる」ようになる

(2) 「社会を観る目・指標（モノサシ）」を得る

(3) 「環境の中で生きる個人」を通して、地域や地域課題を認識・理解する

上記3点には、「環境・状況の中で生きる人間」の理解が伴う。個々の人生はこの関係の中で積み重なり、それが歴史となり地域を構成するのだが、この感覚は日常ではあまり感じることはない。「聞き書き」は、この点を想起させ、個々を尊重しながら、同時にエコロジカル（生態学的）な人間理解を促す教育手法として有効と考えられる。

そして何より忘れてはならないのは、これらの学びの背景には、すべて「話し手の存在」があるということだ。筆者は以前、佐伯（1995）の提唱する「学びのドーナツ論」（図4）をもとに聞き手と話し手の関係性について論じた（伊藤 2015）。

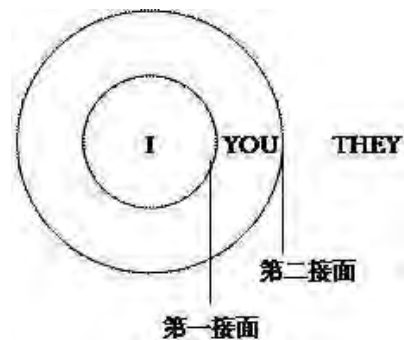


図4 学びのドーナツ

出典：佐伯胖「『学ぶ』ということの意味」、岩波書店、1995、P66

それは、聞き手 (I) は話し手 (YOU) と出会い、その関係を介して、現実の社会・文化的実践の場 (THEY 世界) との関わりを持つというものである。佐伯の言う「YOU 的な他者」と出会い、聞き手 (I) である高校生や大学生は世界を知る。一見すると互いに向き合う関係のようだが、社会・文化的実践の場 (THEY 世界) をともに見つめるという関係がここにはある。この学びの構造は、「聞き書き」が有する「人と出会い、人を通して、人との関係性の中で学ぶ」という人材育成手法としての有効性と、今後の展開可能性を支持するものと言えるだろう。

加えて、分析結果からは聞き手の学び・育ちを超える「聞き書き」の可能性が示された。それは、「学習者」として

の存在であった高校生や大学生が、地域における重要な「媒介者」としての一主体になり得るという可能性である(図3)。

この「媒介者」としての働きは、住民にとっては長年付き合ってきた、知っていると思込んでいた隣人と「出会い直す」装置となった。また、住民の自身や故郷に対する意識も同様であった。誇れるもの、自慢したい歴史・文化・人が「ここにある」ことを、聞き手から問われることで気づき、「代弁者」となった高校生・大学生からフィードバックされる。

本プロジェクトでは、「学校教育の中ではあまり出会わない人に会える」を謳い文句にしてきたが、これは地域住民にとっても同様であったのかもしれない。「聞き書き」における高校生や大学生という、住民の日常にとってある意味で異質な訪問者たちは、水面に小石を投げたときの波紋のように、その関係性を動かし、意識させる。しかしその存在は、関係性を揺り動かすだけでなく、住民同士の「出会い直し」や「つなぎ目を結び直す」、関係性を紡ぐ存在になるのである。

高齢化・過疎化・人口減少等の地域課題に直面する中、庄内地域独自の人材育成方法を模索し実施してきた本プロジェクトであったが、「聞き書き」は、高校生や大学生の学び・育ちに貢献するだけでなく、点在する多世代をつなぎ、個人が持つ記憶をつなぐ「場」となり、これからの地域を担う高校生や大学生を地域にとって重要な異質な他者として迎え入れることができる手法であることが示唆された。

この成果は、人が育つ土壌は「関係づくり(出会いの創出)」から耕されることを示すものとも言える。地域課題解決に向けて主体的に行動できる地域人材を育成するためには、まずは彼らを重要な地域の一員として迎え入れることであり、「聞き書き」はその実現可能性を持つひとつの手法と言えるだろう。(小関 久恵)

Ⅲ 歴史叙述と「聞き書き」

過去の出来事を叙述するには、その手掛かりとなる資料(歴史学では史料)が必要であることはいままでもない。一般にそれは同時代人が残した文書(法律・公的証書などの公文書、手紙・日記、新聞・雑誌など)であるが、図像資料なども含まれる。現代の歴史家が一般に史料として用いる文書資料も、もとをただせば、伝聞資料や実地調査にもとづくものが多いことにあらためて気づかされる。ここでは二つの例を挙げてみよう。

まず、ヘロドトスはその著『歴史』のなかで、次のように記している。「私はメンピスでヘパイストスの祭司たちと面談して、右のほかにもいろいろな話を聞いた。私はテバイやヘリオポリスへも足をのびしたが、それはそれらの町の祭司たちの話が、メンピスの祭司の話と一致するかどうかを知りたいと思ったからであった」(巻二、第3節)。このように、ヘロドトスの情報源のひとつは神殿の祭司たちにあった。特徴的なのは、各地の神殿の司祭たちから情報を入手し、相互に突き合わせて話の信憑性を確かめていることである。

情報の入手先は、祭司に限らなかった。たとえば、ナイルの水源については、正確に知っているエジプト人はいなかったという。そこでヘロドトスはエレパンティネまではみずから実地調査をおこなったが、それから先については現地人から得た伝聞情報にもとづき、推測をおこなっている。ヘロドトスによれば、ナイル川はリビアに発してリビアを横切る川であり、イストロス川(ドナウ川)と同じ位の距離にその水源がある。彼がナイル川の流れをヨーロッパの大河ドナウとの対称関係でとらえている点は興味深い。ここにはギリシア人の世界を中心にして、地中海を横切る東西の中心線を境に北側の世界と南側の世界がシメトリカルに存在するという古代の世界観が如実に反映されている。

次に、客観的な記述内容で信憑性も高いとされるシエサ・デ・レオンの『インカ帝国地誌』を取り上げてみよう。南米インカでは灌漑用水によってトゥモロコシやジャガイモが栽培され、それらの作物がヨーロッパに導入されたことは人口に膾炙していよう。また、ヨーロッパ人が種々の疫病を非征服地にもちこみ、それが人口の激減を招いたことも周知の事実であろう。

シエサの『インカ帝国地誌』にもこれらのことは記されているが、注目すべきはスペインから被征服地である南米にオレンジ、ブドウ、シトロン、ザクロ、イチジクなどの果樹が持ち込まれ、スペイン人の侵入から十数年足らずのうちに南米に根づいていたという事実である。シエサはこうした作物のスペインからの導入についても書き記している。このような記録は、とかくヨーロッパに持ち込まれた作物(その典型はジャガイモ)にばかり目が向けられがちだけに、なおのこと重要であるように思われる。さらに、そうした果樹栽培は灌漑によって可能になっているとレオンは述べているが、これは正鵠を射た指摘である。シエサは「目にしたこと、信頼すべき人々から耳にしたところにもとづき」(本書「序文」)、このインディアスの新世界のことどもを書き記したという。

ヘロドトスとシエサは生きた時代も場所もまったく異なるが、共通しているのは両者ともみずからの目で現場を歩き、みずからの目で観察し、現地の住民（インフォーマント）から得た伝聞情報をもとに叙述をおこなっているという点である。「歩く、見る、聞く」という三要素は、歴史学というよりは民俗学のフィールドワークに近い。ともあれ、ヘロドトスもシエサも、今日でいうところの「フィールドワーク」や「聞き書き」を彼ら流に実践していたのである。

歴史学と「聞き書き」といえば、オーラル・ヒストリー（口述の歴史）が想起されよう。そのなかでも個々人の人生を物語るライフ・ストーリーは、特に移民の歴史において有効性を発揮する。近年、当該分野で注目されるのが佐藤清隆の仕事である。イギリスの多民族都市レスターをフィールドとして、長年にわたって聞き取りによる調査を実施し、その成果を次々に公刊している佐藤は次のように述べている。

「筆者が目にするのは、彼らの「語り」である。今を生きる彼らは、自分たちのライフ・ストーリーや戦後のレスターの歴史をどのように語るのであろうか。こうした点に注目するのは、マイノリティー一人ひとりが語る具体的な生活経験に根差した「語り」に耳を傾けていくことが、戦後レスターの歴史や「多民族・多宗教統合と共生」の問題を再考していく上で、多くの貴重な示唆を与えてくれると考えるからである。」（佐藤、2016：106）

レスターには数多くの南アジア系、ブラック系、ホワイト系住民が居住しているが、エスニック・マイノリティが全体の36%余りを占め、アフリカン・カリビアンもその構成要素のひとつである。そうしたカリビアンの一ひとり、エルヴィの「語り」について、佐藤の研究に依りながらみてみよう。

1935年ネイヴィス島に生まれたエルヴィは1958年に渡英し、看護婦として働き始めるが、そこで人種差別を経験する。患者のほとんどは傷痍軍人で、あるときはエルヴィの黒い手を彼らの身体から放すように言い、またあるときはエルヴィの顔をさすって、黒い肌の色が取れるかどうか確かめようとしたという。否応なしにブラック・アイデンティティを意識せざるを得なくなったエルヴィは、1960年代後半からカリビアン組織化にかかわり、1981年の人種暴動を契機に、レスター・カリビアン・カーニヴァルの開催を企画・実現する。ブラックの子供たちに、ブラックもホワイトも同じく善良で、その違いは肌の色だけであることを教えること、またブラックの歴史をレスターの他の市民にも伝えるのがカーニヴァルの目的であった。

その背景にはエルヴィらの子供たちがおかれていた厳しい現実があった。すなわち、エルヴィらは子供たちの通っていた学校の教師をずっと信頼し、カリブ海諸島の教師と同じだと思っていたが、教師の一部に人種差別主義者がいたのである。また、子供たちはブラックの歴史を何も教えられていなかった。暴動後、こうした人種差別の状況に気づいたエルヴィは、自分たちの歴史や文化を子供たちに教える必要性を痛感し、その試みのひとつとしてカーニヴァルを開催するのである。

エルヴィはレスター・カリビアン・カーニヴァルの委員長を18年間も務めた。他方で、渡英後も熱心にメソジスト教会に通い、「礼儀が人間をつくる」ことを学ぶ。エルヴィに言わせれば、「違いは肌の色だけ」なのである。こうして、エルヴィは当初感じた恐れもなくなり、恐れを感じることなく通りを歩くことができる社会への変化を感じ取ることになる。こうした状況の「好転」の背景には、イギリス政府が人種差別を撤廃するための法を制定し、多文化主義政策をとったことが挙げられるが、それだけではない。何よりも、エルヴィ自身がカリビアン組織化やカーニヴァルの開催などを通じて、カリビアンとして、あるいはレスター市民として努力してきたという思いがあるからであろう、と佐藤はいう。

だが、こうしたエルヴィのイメージは、他の一部のカリビアンにとっては、やや楽観的と映るかもしれない。というのも、佐藤がインタビューしたカリビアンも多くは、現在でも人種差別が存在していることを強調しているからである。たとえば、トリニダード生まれのアンは、1968年に看護婦の勉強をするために渡英した。そして、ロンドンでエルヴィと同じように「ブラックの看護婦」として働いていたが、職場ではいつも抑圧され、自分の意見は全く認めてもらえなかったという。

アンは、自分はブラック・ブリティッシュであるが、イングリッシュであるとは決して思わないという。なぜなら、「ホワイトではない」からである。そして、アンが子供を連れてレストランに行ったところ、そこから締め出された経験について語り、そのような扱いを受けたのは、自分たちがブラックだったためであるという。抗議をしたら、レストラン側は謝罪の手紙と数枚の割引券を送り届けてきたという。ともあれ、こうした不当な扱いを受けた原因は、アンに言わせれば、「肌の色」にある。だが、彼女の口からはエルヴィと同じような「違いは肌の色だけ」といった言葉は一切出てこない。アン目からみれば、レスターの社会状況はブラックにとって、決して「好転」したとはいえないのである。アンにとって、「肌の色」の違いのもつ

意味は大きい。

レスターのカリヴィアン・カーニヴァルについても、アンに言わせれば、ホワイトも大勢参加して「とてもよいと思った」が、しかし「それはその時だけよ。だれでも家に帰ると、それを忘れるわ」と、さめている。

紙幅の関係上、ごく一部しか触れることができないのは残念であるが、同じカリビアンとはいえ、エルヴィの「語り」からは見えてこないものが、他のカリビアン「語り」から見えてくる。それゆえ、佐藤が述べているように、他のカリビアン「語り」にも耳を傾け、エルヴィの「語り」を相対化すると同時に、彼女の「語り」と他のカリビアンたちの「語り」とを紡ぐ作業も必要となる。

ともあれ、こうした聞き取りによる個人のライフ・ストーリーでは、公的文書や統計的な数字では決して見えてこないものが表出する。それは移民一人ひとりの自分史であると同時に、レスターという多民族都市の歴史の一断面を浮き彫りにしている。

佐藤の Memory and Narrative Series と「聞き書き」には叙述方法の違いはあるものの、通底するものがある。それは一人ひとりの生活経験に根ざした「語り」がベースになっているということである。そして、そこから見えてくるものは一人ひとりが語る深層の「日常」にほかならない。(遠山 茂樹)

【参考・引用文献】

I

- Bertaux, Daniel., 1997, “Les Récits de Vie. Perspective Ethnosociologique”, Nathan/HER, Paris, (= 2003, 小林多寿子『ライフストーリー—エスノ社会学的パースペクティブ』ミネルヴァ書房)
- Garfinkel, H., 1967, “Passing and Managed Achievement of Sex Status in an ‘intersexed person’ part1 an abridge verstion, ” Studies in Ethnomethodology, Prince-Hall. (=1987, 「アグネス、彼女はいかにして女になりつづけたか—ある両性的人間の女性としての通過作業とその社会的地位の操作的達成」山田富秋ほか訳『エスノメソドロジー—社会学的思考の解体』せりか書房)
- 岸信彦 2015 「鍵括弧を外すこと—ポスト構築主義社会学の方法論のために」『現代思想』7月号 第43巻 第11号 青土社
- Lewis, Oscar., 1961, The Children of Sanchez, Autobiography of a Mexican Family. (=1986, 柴田稔彦・行方昭夫共訳, 『サンチェスの子供たち』みすず

書房

- 中野卓・桜井厚編 1995『ライフストーリーの社会学』弘文堂
 - 大日方純夫 1993『警察の社会史』岩波新書
 - Plummer, Kenneth., 1983, Documents of Life: An Introduction to the Problems and Literature of a Humanistic Method, George Allen & Unwin. (=1991 原田勝弘他 監訳, 『生活記録の社会学—方法としての生活史研究案内』, 光生館)
 - 桜井厚 2002『インタビューの社会学—ライフストーリーの聞き方』せりか書房
 - 桜井厚, 西倉実季 2017「対話的構築主義との対話—ライフストーリー研究の展望」『現代思想』3月号 第45巻 第6号 青土社
 - Shaw, Clifford R., 1930, The Jack-Roller: A Delinquent Boy's Own Story. (=1998, 玉井眞理子・池田寛訳『ジャック・ローラー—ある非行少年自身の物語』東洋館出版社)
 - Tomas, W. I. & Znaniecki, F. W., 1918-20, The Polish Peasant in Europe and America, 5 vols. (=1983 桜井厚訳『生活史の社会学—ヨーロッパとアメリカにおけるポーランド農民』お茶の水書房)
 - 吉原直樹 2011 「開かれた都市空間と安全安心のまちづくりの課題」『コミュニティ・スタディーズ』作品社
 - 渡辺暁雄 2015 「住民参加のまちづくりにおける課題意識の醸成と共有—山形県鶴岡市加茂地区における—」日本公益学会『公益学研究』第14巻 第1号
- ### II
- 聞き書き研修テキスト《事前学習用》『塩野米松流聞き書き術』(第1回森の“聞き書き甲子園”事前研修—平成14年8月27日講義)
 - 久島桃代 2010 「自地域学「会津学」の活動とその理念」『季刊地理学』62, 127-138
 - 六車由美 2012 『シリーズ ケアをひらく 驚きの介護民俗学』医学書院
 - 佐藤伸彦 2015 『ナラティブホームの物語—終末期医療をささえる地域包括ケアのしかけ—』医学書院
 - 米山誠 1976 「表現意欲を喚起する作文教育の研究—中学生・高校生に対する「聞き書き」の指導を通して—」『名古屋大学教育学部附属中・高等学校紀要』21, 51-57
 - 藤田明 1993 「聞き書きの問題」『第13回研究発表大会発表要旨』日本文学 42 (6) , 87

- ・雲山由美子 2002 「「伝え合う力」を育てるために— インタビュー・聞き書き・新聞づくりを通して—」『国語教育研究』45, 102-118
- ・遠藤瑛子 2005 「中学校における聞き書き 単元「人あり」の実践」『全国大学国語教育学会発表要旨集』108, 115-118
- ・礼埜和男 2015 「国語科教育におけるインタビュー実習に基づく聞き書き授業の研究」『京都教育大学国文学会誌』40, 46-64
- ・安藤愛, 興梠克久 2014 「森林環境教育としての「聞き書き甲子園」の社会的意義とその効果」日本森林学会誌 96 (3), 123-131
- ・石井克佳 2011 「言語活動を充実させる森林環境教育の実践—聞き書きの手法を取り入れた農山村調査—」『筑波大学附属高等学校研究紀要』48, 65-80
- ・石井克佳 2013 「「アジアの高校生による聞き書きプロジェクト」におけるコミュニケーション能力の測定について」『筑波大学附属高等学校研究紀要』50, 97-105
- ・佐伯胖 1995 『「学ぶ」ということの意味』岩波書店
- ・伊藤真知子 2015 『人材育成の方法としての「聞き書き」に関する領域横断的研究—「庄内の達人プロジェクト」の実践を通して—報告書』東北公益文科大学地(知)の拠点整備事業平成26年度地域課題基礎研究《プロジェクト型》, 東北公益文科大学聞き書き研究会

III

- ・ヘロドトス, 松平千秋訳 1971 『歴史』(岩波文庫, 上)
- ・シエサ・デ・レオン, 増田義郎 2007 『インカ帝国地誌』(岩波文庫) 岩波書店
- ・佐藤清隆 2014 「他民族都市レスターのアフリカン・カリビアンたち」『明治大学人文科学研究紀要』第74冊
- ・佐藤清隆 2016 「戦後レスターの多民族統合とアフリカン・カリビアン—エルヴィの「語り」から見えてくる世界—」, 道重一郎編著『英国を知る』同学社所収
- ・Kiyotaka Sato, Memory and Narrative Series 1~9, 刀水書房, 2010-2016(現在, シリーズ Two を刊行中)。エルヴィのインタビューについては No. 1 を参照。なお, 本稿で触れたトリニダート生まれのアンインタビューは, 当シリーズには収載されておらず, 引用は佐藤清隆・前掲二論文に依る。
- ・Lawrence Stone, “The Revival of Narrative: Reflections on a New Old History”, Past and Present, No. 85, 1979.

ちなみに, ローレンス・ストーンはこの論文において, アナール学派の歴史家たちも, 「構造史」よりはナラティヴに回帰していく傾向にあることを指摘し, ナラティヴ・ヒストリーにとって大事なものは, 「分析」よりも「叙述」, 「状況」よりも「人間」であると述べている。このことは, 「聞き書き」を考えるにあたってでも示唆的である。

東北公益文科大学総合研究論集第34号より再録